

夏秋小ギクを需要期に安定出荷するための 露地電照栽培向け品種の選び方

品種の自然開花期に依存する夏秋小ギク生産は、年ごとの気象条件によって開花期が変動するため計画的な出荷が難しくなります。夏秋季の長い自然日長でも開花しやすい品種を選び、電照栽培で開花期を調節することで、計画どおりの安定出荷が可能になります。

☆ 技術の概要

1. 本技術は、小ギクを7～9月に出荷する露地圃場を対象に、電照によって花芽分化を抑制し、消灯後に開花を促進させる栽培技術です。電照栽培に適した品種を選ぶことで、開花時期を高い精度でコントロールできます。消灯日は、出荷目標日から各品種の到花日数（消灯から開花までの日数）を逆算して決定します。

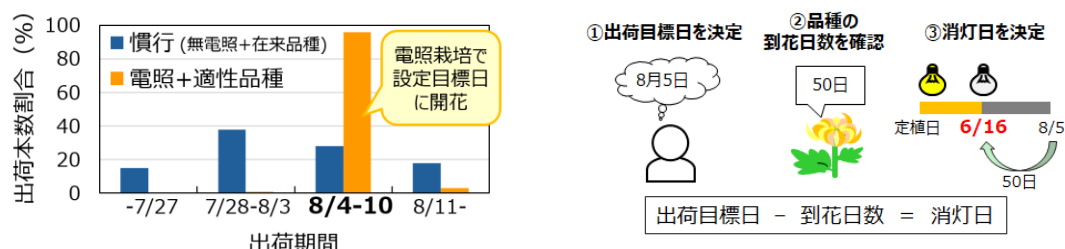


図 盆需要期を出荷目標とした電照栽培の実施例（左）と消灯日の決定（右）

2. 夏秋季の長い自然日長には、消灯後の開花を抑制する作用があります。そのため、同じ品種でも、消灯日の違いによって到花日数が変動します。開花の限界日長（その品種が開花できる最も長い日長）が長い品種ほど、栽培地域や時期による日長の違いの影響を受けにくくなり、夏秋季の自然日長条件下での到花日数の変動が小さくなります。

品種名	開花の 限界日長	栽培地・消灯日						到花日数の 標準偏差
		茨城県・ 6/12	宮城県・ 6/4	宮城県・ 6/11	秋田県・ 5/31	秋田県・ 6/7	秋田県・ 6/14	
消灯後開花日数								
精しらいと	14.0	48	60	57	62	68	61	8
精こまき	14.5	50	56	53	71	57	67	8
精しらたき	15.0	50	55	53	58	52	53	3
精ちくさ	15.5	47	53	51	54	51	50	3

この事例では、高緯度地域（宮城・秋田）の長い自然日長が開花抑制に作用している。開花の限界日長が長い品種の到花日数は、消灯後の日長条件が異なっても変動しにくい。

表 栽培時期・地域による消灯後の自然日長の違いが到花日数に影響する

3. 露地電照栽培では品種の選定が重要です。開花の限界日長が長く、到花日数が安定している品種を用いることで、需要に合わせた出荷期の調節が可能になります。

☆ 活用面での留意点

具体的な品種の選定と、適用地域や栽培条件等は、「露地ギクの電照栽培による夏秋期の計画安定生産技術標準作業手順書」(<https://sop.naro.go.jp/document/detail/195>)を参照してください。
(農研機構・野菜花き研究部門 中野善公)